

娘と二千両

野村胡堂

一

「わッ驚いた、ドブ板が陥穴おとしあなになつてゐるぜ。踏み返したとたんに赤犬が噛み付きそうに吠える仕掛は念入り過ぎやしませんか、親分」

ガラッ八の八五郎は危うく格子戸につかまつて、件の噛み付くような赤犬を追いつながら、四方構あたりわぬ声をあげるのでした。

「静かにしろ、そいつは皆んな借金取除けの禁呪まじないなんだ、——今日を何時だと思う」

捕物の名人銭形の平次は、六畳縁側近く寝転がったまま、こんな馬鹿なことを言うのです。

「良い御用聞が、大晦日おおみそかでもないのに、天下泰平だぜ」

八五郎はこんな毒を言いながらも。妙につまされてホロ苦い顔をするのでした。

四月三十日、初鯉はつがつおにも、時鳥ほととぎすにも興味はなくとも、江戸の初夏の風物はこの上もなく爽さわやかな昼下がりです。

「お前のような家の子郎党は、搦からめ手から通りや宜いのさ。妙に見識張つて大玄関にかかるから、手飼いの獅子王に吠えつかれるんじゃないか」

「ヘッヘッ。手飼いの獅子王は嬉しいね——その怪物が大玄関で魚の骨をしゃぶつてゐるぜ」

無駄口をいいながらもガラッ八はノッソリと平次の前に突っ立って居ります。

「まア坐れ、突っ立ったまま物を言う奴があるかい——坐ったら懷ろ手を抜くんだ。世話のやける野郎じゃないか」

「今日は意地の悪い姑しゅうとのように口うるさいんだね。よつほど執念しゅうねん深い借金取でも来たんですかえ」

「余計な世話だ。それよりお前の方の用事を先に片付けるがいい、——いったい何を嗅ぎ出して来たんだ」

「褒美付の捜し物ですよ、——こいつを捜し出しや、褒美の金が百両——小判で百枚ですよ。憚はばかりながら親分が頭痛に病んでいる家賃や酒屋の払いは精々二分か一両、思い切り溜めたところで三両とはないでしょう」

「恐ろしく見縊みくびりやがったな」

「ちよいと乗出して下さいよ。銭形の親分が顔を出しや、紛失物の方からノコノコ名乗って出ますよ」

「ところで、その捜し物というのは何んだ」

「小判で二千両」

「大層な紛失物じゃないか、二千枚の小判は財布さいふや巾着きんちやくには入めえ、誰が何処で落つことしたんだ」

「落したんじやありません。消えてなくなったんで」

「春先の雪達磨ゆきだるまじやあるめえし、小判や小粒が消えてたまるものか」

「だから不思議なんで、まア聴いて下さいよ親分」

ガラッ八はここまで平次の興味を釣っておいて、お先煙草の烟けむりを輪に吹きながら、静かに語り出すのでした。

「百両の褒美は気障きざだが——二千両の小判が消えてなくなるのは陽気のせいじやあるめえ」

平次はまだからかい面ですが、充分好奇心は動いている様子です。

「飯田町の鬼と言われた、金貸の作兵衛は親分も知ってますね」
「こちらには百文も貸す気遣いはねえが、旗本や御家人泣かせで名高い親爺だ」
おやし

「その作兵衛は去年の秋死んで、後家のお角が奉公人を使って先代の家業をつづけていますがね、——この女は男勝りの強か者で、先代の遺言だからと言って、三千両という大金を投出して、旗本の株を買い、俵の佐太郎を武家にすることを企らんだ——」
たく

「大きい声じゃ言えねえが、そいつは篋棒な話だね」
べらぼう

平次は苦々しく舌打をします。徳川時代の階級制度はずいぶんやかましいものでしたが、一面にはまた旗本や御家人の株の売買が行われ、経済的に行詰った武家が、金持の息子に入れる形式で、ほとんど公然と株の売買が行われたのです。

「全く大篋棒さ、こちらなら、その三千両で八方の借を払って、あの娘に半襟のひとと掛も買ってやって、大福餅の暴れ喰いをやる」
はんえり
「馬鹿だなア——それから何うした」

平次は嘔んで吐き出すように言って、次を促しました。馬鹿の主格はガラッ八にも判然しません。
うなが

「——尤もそのうち一千両は、去年の五月一日作兵衛が生きているうちに相手の旗本に貸した。抵当はないが、その代り今年の四月三十日——つまり一年目の今日までに返さなければ、作兵衛の俵の佐太郎が、後釜の二千両を持参金に、養子になって飛込むことになっていた」
もっと

「相手の旗本は？」

と平次。

「大きい声じゃ言えねえが、中坂の大河内大膳様——五百石の身だ」

「相手が悪いな」

「大河内家には年頃の娘がある、尤もこいつは恐ろしい不纏きりようだ。人三化七と言たい度いが、人一化九で、少々智恵の方も足たりない」

「フーム、いよいよ篋けう棒だな、お前なら何うする？ 八」

「御免蒙こうむつて、大福餅の暴れ喰いをやらかしますよ。第一こちらが五百石の旗本になったところで、殿中の居屈みを知らねえ、

——五百石と言ええばお目見得以上だ」

「大河内家の方では、佐太郎を聳こにすることを望んでいたわけだな」

「佐太郎はちよいと良い男ですよ、それに千両の借金が棒引になった上に持参金が二千両。それだけ入れば貧乏摺ずれの大河内大膳様は、自分の鼻でも削そいで売る」

「呆あきれた話だ」

「ところが、その二千両の金が、明日大河内家へ持込むという前の晩、神隠しに逢ったように消えてなくなったんだから面白いでしょう」

「面白いって——奴があるか」

平次はさすがに常識じょうしきを取戻しました。

「店へ置いちゃ危ないし、土蔵へ入れると朝早いから出すのが面倒だ。娘のお冬の部屋は裏の一番奥で、入口は廊下から一つだけ、外は頑丈な格子だから、一番安心だろうというので、後家のお角と番頭の平吉が相談の上、誰にも知らせずに、千両箱を二つ、そつ

と娘の部屋の押入へ隠して置いた——たった一と晩だけのつもりで」

「娘は知っていたのか」

と平次。

「自分の部屋に二千両の大金が隠されるのを知らない筈はありませんがあれは十八になったばかりで、咲き立ての桃ももの花のような娘ですよ。二千両に眼をくれる筈もなし——」

「若くて綺麗な娘というと、無暗に肩を持つが、そんなのが飛んだ細工をしやしないか、——貢みつがなきゃならない相手でもあつて——」

「飛んでもない、そんな娘か娘でないか、逢えば一と眼でわかりますよ」

「格子は？」

「小判を箱から出せばもぐりますが、容器いれものの千両箱二つ——金具の嵌はまった恐ろしく頑丈なのを格子の外へ出す工夫はありません。それは番頭が奥と店の境に陣取つて、一と晩まんじりともしなかつたそうで、千両箱を店の方へ持出す工夫もない筈です」

「フーム、面白そうだね」

「——でしょう、親分。後家のお角は躍起やつきとなつて、いくら金貸が商売でも、二千両という大金は今日中には纏まとまらない、今日中に二千両の金を大河内様へ届けなきゃ、去年用立てた千両の金までがフイになる——倅を武家にしたいというのは、亡なくなつた夫の何よりの望みで、くれぐれも私に遺言して死んだくらいだから、是が非でも二千両の金を探し出して下さい。その代り今日中に探し出して下されば、お礼が百両——と切り出しましたよ」

「フーム」

「百両の礼金が入れば、^{はばか}憚りながら^{たな}店賃や^{みそしょうゆ}味噌醤油代で親分に苦勞はさせねえ」

「馬鹿野郎」

「へエ——」

銭形平次は不意に一喝^{かつ}をくれて起直りました。

「そんな金なんぞは要らねえよ」

「ヘッ？」

「欲しくばお前が二千両捜し出して礼金でも賽銭でも勝手に貰え。俺はイヤだよ」

「百両ですよ親分、小判で百枚」

「百両が千両でも俺は御免こうむるよ。岡っ引はしているが、ドブさらいや宝捜しは大嫌いだ——さつさと帰ってくれ、そんな野郎とは付き合いたくねえ。まごまごしやがると獅子王をけしかけて向う脛^{すね}に食いつかせるよ」

「驚いたね、どうも」

ガラッ八は平次が何を怒っているのかさえも解らぬ様子で、^ほ這う這うの体で飛出しました。この見幕では粘^{ねば}っていたところで宝捜しの相談などには乗ってくれそうもありません。その癖平次は大した怒った様子もなくガラッ八の後ろ姿を見送ってニヤリニヤリ笑っているのですが——。

二

「サア大変ッ」

翌る日の朝、ガラッ八の八五郎は路地の外から斯う怒鳴り込ん
で来ました。

「何が大変なんだ、お長屋の人達が一ぺん毎に胆きもを潰すじゃない
か。岡っ引や坊主は滅多なことに驚くもんじゃねえ」

平次は相変らず初夏の日向に並べた、貧しい植木をいつくしみ
ながら、一向驚いた様子もない顔を挙げました。

「坊主と一緒にされりゃ世話アねえね、親分金貸のお角かくのところ
へ、いよいよその坊主が入りましたぜ」

「坊主が入った？」

「娘のお冬が死んだんです。傷も何んにもないから殺されたとも
思われないが、町内の本道（内科医）が二人で診みて、病氣はない
と言うんで」

「殺されたのでも、病氣でもないとする——？」

「だから大変じゃありませんか。前の晩二千両の小判がなくなっ
た部屋で、今朝はあの可愛らしい娘のお冬が冷たくなっていたと
したら、こいつは驚くのが当り前でしょう」

「二千両はとうとう昨日のうちに見付からなかったのか」

「口惜くやしいが百両の礼金はフイになりましたよ。よくよく縁がな
かったんですね」

ガラッ八は大した悲観もしていない様子です。

「ともかく行ってみるとしようか、現場には手をつけさせなかつ
たろうな」

「番頭の平吉が、部屋の入口に頑張がんばって誰も入れさせないことに
してありますよ。それに死骸の側には煙草入が落ちていたんで」

「煙草入？ そいつは誰のだ」

「居候の金之助という男の煙草入で、紺羅紗こんらしやの洒落しやれた品ですよ」

「その金之助という男は何うした」

「手代の与助に見張らせてあります」

そんな問答を取交している間に平次は手早く仕度をして、ガラッ八と一緒に出かけました。

飯田町へ行ったのは昼少し過ぎ、金貸のお角の家は、不安と疑ぎ惧ぐと悲嘆に重苦しく閉じこめられて、たまたま大きい声で物を言う者があると、家中の者が弾はじき上げられたほどびっくりするといった不思議な静けさでした。

先代の作兵衛が一代で築き上げた身上しんしょうで、高利貸という稼業から来る反感のほかに、町内から白い眼で見られていた関係もあり、これほどの騒ぎがあつても寄りつく者もなく、家中の者だけが唯ひっそりと、次に来る不吉なものを待つような心持で睨み合っているのです。

「御苦労様でございます、親分さん方」

女主人のお角は、五十七八の丈夫そうな老女で、良人が生きているうちは、一向人にも気付かれない存在だったのが、夫が死んで自分が一家を背負って立つとなると、俄然頭角を現わして、何も彼も一人で切つて廻し、奉公人は言うまでもなく、倅や娘にも一と言も口をきかせないと言った、いわゆる男勝まさりの肌合と言われる質たちの女でした。

「変ったことはないかえ」

ガラッ八がまず口を切りました。

「煙草入が見えなくなりましたよ」

「煙草入が？」

「娘の死骸の側に落ちていた紺羅紗こんらしやの煙草入が、いつの間にやらなくなってしまう——部屋へは誰も入れないように、入口に番頭が見張っておりましたが」

「その煙草入の持主は確かに金之助だね」

平次は始めて口をききました。

「私にはよくわかりません——与助はたしかに金之助の煙草入だと申しましたが、お梅は色合が少し違っているようだと申します。紺羅紗の煙草入も多いことでしょうから何んとも申し上げられません」

話しながらお角は平次とガラッ八を裏の六畳に案内しました。なるほど中廊下の突き当りで、廊下の左右には母親のお角の部屋と兄の佐太郎の部屋があり、この廊下以外に入口がないとすると、二千両なくなったのも娘のお冬が死んだのも、解けようのない大きな謎になるわけです。

「入口は此処だけだと言ったな」

平次はなお念を入れました。

「ハイ、それに私と伴の部屋の前を無事に通っても、その先には番頭の平吉の部屋があり、その前を通らなければ、店へもお勝手へも出られません——あの晩番頭の平吉は二千両のお金のことが気になって、とうとうまんじりまんじりともしなかったと申しますし」
そういううちに三人は部屋の入口に立っておりました。そこには五十前後の番頭の平吉が異常な興奮と不眠の疲れつかれとを一緒にたにしたような一種イライラした表情で迎えるのです。

「親分さん方お骨折りでございます」

年齢よりは老ふけて見える物腰、よく禿はげた前額、柔和な眼——

すべて典型的な番頭でこの男だけは悪いことを企みそうもありません。

部屋の中は少し薄暗く、突き当りは一間の頑丈な格子で、右手は——これも恐ろしく丈夫な格子窓、地震や火事の時はずいぶん危ない部屋ですが、格子の外は狭い路地なので、これ位の用心は必要だったのでしよう。

「親分さん、娘はどうして死んだのでしよう」

ここへ来るまで、少しも取乱した様子のなかった母親のお角も、娘の死骸を見るとさすがにたまり兼ねたものか、男勝りと言われた誇り^{ほこ}をかなぐり捨てて、冷たい娘の頬に、自分の頬を摺寄^{すりよ}せてひた泣きに泣くのでした。

お冬は十八というにしては少し若く、まだ幼々しさの抜けきらない可愛らしい娘です。平次の馴れた眼で見ると、死に顔に苦悩の痕があり、——顔も少しは脹^はれていると——それはお角が平静な心持に還^{かえ}った時、平次の引出した言葉でした。

平次は経机の上の香炉に一抹^{まつ}の香を捻^{ひね}って、しばらく拝んでから、静かに娘の死骸に近づきました。懷ろに突張る十手を、そつと後ろの方に廻したのも、職業意識がこの清らかな娘の死を冒瀆^{ぼうとく}しはしないかと——平次らしい嗜^{たしな}みがさせたささやかな仕草でしょう。

死骸は玉のように無^む垢^{きず}でした。打ち見たところ一滴の血も、一髪^{はげ}の傷も其処にはなかったのです。

「昨夜の食物は？」

平次は訊ねました。

「皆んな同じものを食べました。尤^{もつと}も娘は昨日の二千両騒ぎで疲

れた様子で、皆んなより早く寝ましたが――」

「皆んなより早く」

「戌刻（八時）少し過ぎでした」

「それから、この部屋へ入ったものはないのかな」

「店もお勝手も、二千両の金を捜すので、夜半まで煤掃きすすはのような騒ぎでした。――誰か来たかわかりませんが、亥刻（十時）過ぎに伴が来た時はよく眠って居たようだったと申します」

「その時――いやこれは佐太郎から訊こう」

平次は言葉を切りました、ちょうどそのとき伴の佐太郎が、打ち萎れた姿で妹の部屋へ入って来たのです。

三

佐太郎は少し弱々しい感じの、二十五六になる典型的な若旦那でした。

「――」

黙って挨拶するのを迎えて平次は、

「佐太郎さんと言ったね、昨夜この部屋を覗いた時のことを詳しく聴きたいが――」

穏かな調子で斯う切り出しました。

「妹にちよつと聴きたいことがあって来て見ました、亥刻（十時）少し過ぎだったでしょう。妹は窓の方を向いて、よく眠っている様子でした。どうかしたら、あのとき死んでいたのかも知れませんが――声をかけましたが、返事がなかったので、そのまま帰りましたが――」

佐太郎の言葉は、激情にかき乱されて途切れ途切れですが、何んの企たくらみもあらうとも思われません。

「妹に訊きたいことがあったと言うのは？」

「――」

平次の問いは嚴重でしたが、佐太郎は眩まぶしそうに瞬またたいたきり、黙って眼を伏せました。

「ところで、旗本の株を買って武家の養子になるというのは誰が一番望んでいたことだ」

「――」

「それを言い出したのは？」

「亡くなった父親の遺言でした。――父は口癖のように、――私は百姓の子に生れて、中年から江戸に出たが、一生爪つめを灯ともすような辛棒をしても、たったこれだけの身代を拵つとめるのが関の山であった。千両万両の金を積んでも、町人はやはり町人で侍の前には頭が上がらない。私の一代はどうすることも出来ないが、せめて私の子孫だけは二本差にして、一生諸人の上に立たせたい――と斯う申しておりました」

「お前はと思う？」

「――」

平次の問いには答えず、佐太郎は憶病らしく母親の顔を見るのです。

「思ったままを言うが宜い」

と平次。

「本当のことを言うと、私は町人の方が好きですが――」

「武家になりたくはなかったのだな」

「え、二本差という柄じゃありません」

佐太郎は蒼白い顔を紅潮さして、極り悪そうに笑うのです。一徹者らしい母親——父の遺言をそのまま実行に移すためには、どんなことでも忍ぼうとしているお角の前で、これが佐太郎に取っては精いっぱい反抗だったのでしょう。

「そのとき紺羅紗こんらしやの煙草入はこの部屋にあったのだな」

「いえ、——昨夜は気が付きませんでした」

これ以上のことは、佐太郎から引出せそうもないと見ると、平次はガラッ八を促して店の方へ行きました。

お勝手の側を通るときそつと平次に目礼した艶なまめかしい影があります。

「あれは？」

「姪めいのお梅というので——姪といつてはいるが遠い縁続きの女だそうでこの家の掛り人かか うどですよ」

ガラッ八はそういういいながら、追いつがるようにその女を呼んで来たことはいふ迄ありません。女の様子が妙に氣を持たせたところのあるのを、平次は早くも『何にかいい度たいことを持っている素振り』と見て取って、ガラッ八だけに通ずる合図をしたのです。

「お前がお冬に一番お仕舞にあったのは何時いっだ」
平次の問いは唐突とうとつでした。

「あの、昨夜——まだ宵のうちでした。お冬さんは加減が悪そうだったので念のため覗いて見ましたが、その時はまだ眼が覚めていて少し頭痛がする様子だが熱でもあるんじゃないかしら、——というから、額にさわって見ましたが」

「？」

平次の瞳に逢うと、お梅はハツとした様子で、

「——でも熱なんかなかったようです——私はすぐお店の方へ戻りましたが、その後で与助さんが行ったようです」

斯う新しい事を言い出すのでした。この女はまだ二十三四でしようが、少し嫁ととぎ遅れの気味はあるにしても、何んとなく淋しい——その癖妙に思わせ振りの、まずは美しいと言われる年増です。

「佐太郎は武家になるのを嫌っていたというが本当か」

「え、あの通り弱々しい人ですから」

「お冬には縁話でもなかったのか」

「まだ十八ですもの」

そんな言葉の一つ一つに、深い深い意味でも籠るような、思わせ振りの調子は、色っぽくはあるにしても、相手をひどく苛いら立たせます。

店へ行くと手代の与助が、落付かない様子で彼方此方を片付けておりました。まだ二十七八でしようが、薄菊石うすあばたの小男で、三十にも三十五にも見える不景気さが、この男をひどく老実らしく見せるのです。

「お前は？」

「与助と申します、へエ」

「ゆうべお梅が行った後で、娘の部屋を覗いたそうだな」

平次の突っ込みは遠慮も会釈ありません。

「イエ、へエ——、参りましたが、お嬢さんはもうお寝みの様子で廊下からちよいと覗いたきり直ぐ戻りました、へエ」

「何んな用事があったのだ——夜更けに若い娘の部屋を覗くのは穏やかじゃないぜ」

「夜更けと申してもまだ亥刻前よつで、それに唯ちよいと、気分がどうか訊きたかったので——へエ、ひどくお疲れのようでしたから」

「たいそう思いやりがあるんだね」

「へエ——」

与助は醜みにくい顔をゆがめて、極り悪そうに小鬢こびんを搔かいております。つづいて平次は与助に見張られながら庭のあたりで物を探している金之助をさし招きました。

「へエ、私が金之助でございます」

これは三十そこそこでしょう、無造作な身み扮なりと磊落らいらくな物言いが特徴で、面長な色の白い、歌舞伎役者の誰やらに似ていると言われた好い男です。

「娘の側に紺羅紗の煙草入があったそうじゃないか」

平次はここでも直接法の訊問です。

「驚きましたよ。紺羅紗の煙草入を持っているのは、店中でこの私だけで」

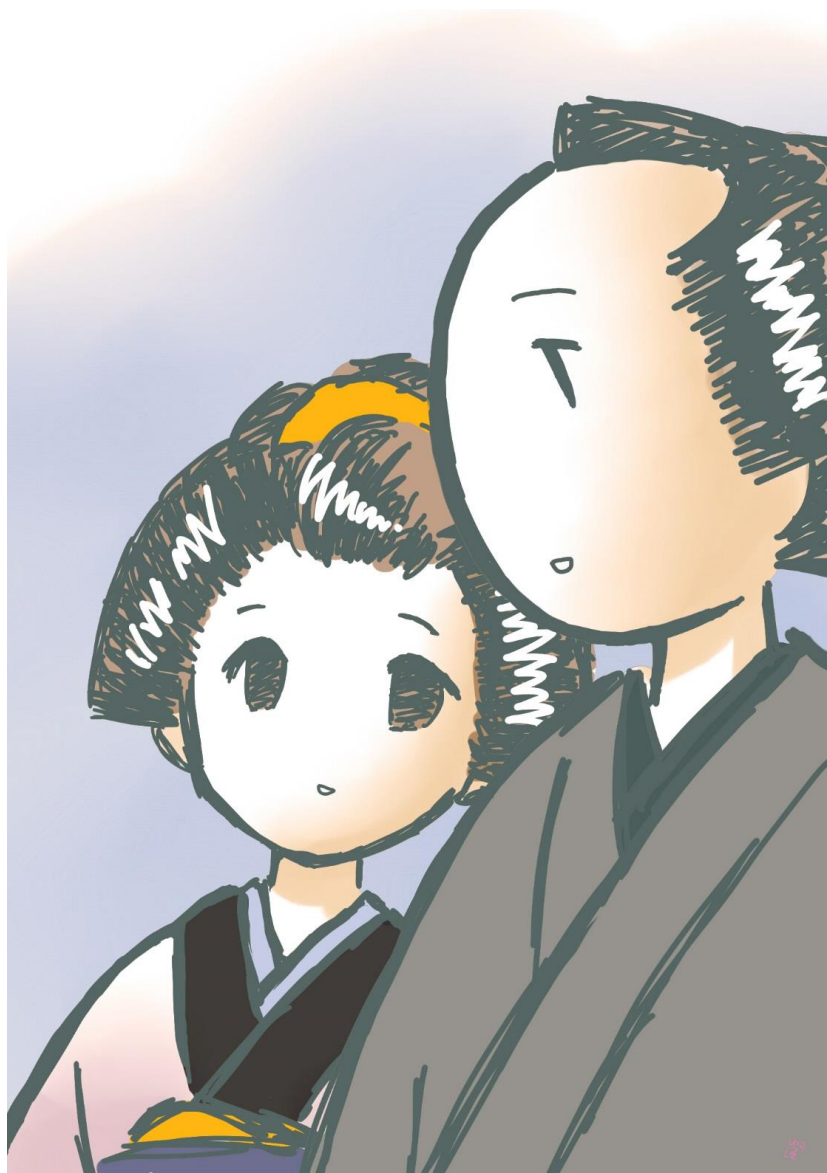
「娘が変死したとなると、差向お前に下手人の疑いがかかるわけだな」

「と、飛んでもない、親分」

金之助はさすがにあわてましたが、平次がこんな突っ込んだことをいう癖に、案外ニコニコしているのでいくらか安心した様子です。

「死んだお冬は誰と一番親しくしていた」

「兄さんの若旦那でしょう。そりゃ仲の好い兄妹で」



「お前とは」

「へッ、私はこの通り居候で何んと思ったところで仕様がありません——可愛いお嬢さんでしたかね」

「昨夜、^{ゆうべ}お冬の部屋へは行かなかったのか」

「あの騒ぎでしょう、店中を捜し廻って手洗へも行きませんよ。番頭さんにきけばわかりますが」

与助は店から一度奥へ行ったが。金之助は夕飯の後すぐ二千両捜しに手伝って、寝るまで奥へ行くひまはなかったらしく、^{よつ}亥刻半（十一時）過ぎ銘々の部屋へ引取った後は店二階に寝る金之助が老番頭の平吉と、お角と佐太郎の注意をひかずにお冬の部屋へ行く方法はなかったのです。

後でわかったことですが、金之助はお梅に変な眼で見られるのが嫌だったらしく、減多にお冬とは口もきかず、お冬の部屋など

を覗くような不作法なこともしなかったというのが本当のところでした。

四

「親分、いろいろのことを聴き出して来ましたよ」

少し持て余し気味で、お茶を呑んで裏庭をブラブラしている平次のところへ、何処へ行ったか、しばらく姿を見せなかった八五郎がやって来たのです。

「どこへ行つて来たんだ」

「御近所ですよ、向う三軒両隣り、——親分がよく言うでしょう。」

こんがらかって判らなくなったら、少し離れて遠くから見ろ——つて、その術をちよいと借りたんで

「で？」

「若旦那の佐太郎が、旗本の株を買って二本差になるのを、ひどく嫌がつていたことはもう調べ済ですね」

「それから」

「居候の金之助とあの洒落^{しやれ}た年増のお梅がお安くないんですつて、こいつは初耳でしょう。尤も近ごろは金之助の野郎大望を起して、娘のお冬にチャホヤして居たって言いますがね、何んと言つても相手は十八——まだねんねだから、手応^{てこたえ}があつたかなかつたかわかりませんよ、それに——」

「それに——どうした、恐ろしくすっぱい顔をするじゃないか」

「あの手代の与助が身の程も知らずに、娘のお冬を追ひ廻していったんだそうで——お冬が嫌がるまいことか、つき物がしたように

逃げ廻っていたといいますよ、ゆうべお冬の部屋を覗いたのもそんな下心でしょう——太てえ野郎じゃありませんか」

八五郎がむやみにポンポンいふのを平次は軽く受け流しました。

「それっきりか」

「根つきり葉つきりこれつきりで——」

「御苦労御苦労、それだけでも解れば助かるよ——俺の方はけさお梅と金之助がこの辺で逢引あいびきをしてひどく親しそうにしていたのを見たという人をつかまえたよ」

「そいつは誰です」

「隣の小僧だよ——酒屋の」

「へエ——」

「こんな事でもう切上げるとしようか」

「二千両の行方は？」

「わからないよ——」二千両を持出した様子がなきや最初からそんな金が無かったのかも知れないじゃないか」

「へエ——」

「有ったにしても持出せるのは女主人のお角かくと、伴の佐太郎と、番頭の平吉だけだ。外から泥棒が入った様子はなし」

平次はこういいさしてフト考え込んでしまいました。

「親分、それじゃ、あの死んだ娘が——」

「そうだ、あの娘は知っていた筈だ。押入から千両箱を二つ持出されるのを、いくら若い娘の寝入ばなでも、まるつきり知らずにいる筈はない、——もう一度行つて見よう」

平次は憑つかれたもののように、家の中へ入って、廊下を真つす

ぐに娘の部屋へ行きました。後から八五郎と女主人のお角と、番頭の平吉と伴の佐太郎が不安らしく跟ついて行つたことは言うまでもありません。

「八、襖を皆んな開けてくれ」

「斯こうですか」

「それから、この床を動かすんだ」

「へエ」

平次はガラッ八に手伝わせて、死んだ娘の床を、窓側から廊下寄りに移し、窓から入る明るい光線に透すかして、一枚一枚畳を調べて居りましたが、ちょうど娘の床を敷いていたところの畳たたみが、少しばかり喰い合せが歪ゆがんだ上、藁屑わらくずらしいものがハミ出しているのを見ると、

「この畳を剥ぐんだ、手伝ってくれ——この部屋の中の死骸の下とは気が付かなかったよ」

平次はそう言いながら、八五郎に手伝わせて、疑問の畳を一枚剥ぎました。畳の下したの床板は隙間だらけのガタガタになっていて、その一枚に手を掛けると、何んの造作もなく剥げて、下からは湿しめっぽく泥臭い風が、スーと不気味に吹き上がります。

「掘るものを持って来ましょうか、親分」

「いや、手で沢山だ——あの小高くなつているところを掘って見
てくれ」

「へエ」

ガラッ八は気の早い実行家で、躊躇ちゆうちよというものを知らぬ男です。いきなり床下に飛込んで、小高くなつてい土を搔くと、その下から現われたのは、言うまでもなく二つの千両箱。

「まア、そんなところに——娘のしたことだろうね」

驚く母親のお角の前に、倅の佐太郎は黙って首を垂れています。
「死んだ妹さんのせいにしちゃ気の毒だ。思い切って、皆んな
言った方が、後腐れがなくて宜くはないかね」

平次は俯向いた佐太郎にこう促うながしました。

「ありがとう、親分——私は黙って居ようと思ったが、それじゃ
反って妹のためにも、私のためにも悪かろう——ねお母さん、二
千両の小判をここへ隠したのは、お冬じゃなくて私ですよ、この
佐太郎ですよ」

「何んだとえ」

母親の激しい驚きと怒りも、もはや純情にかり立てられる青年
の口を塞ふさぐ力はありませんでした。

「私は侍になんかなるのが嫌で嫌でたまらなかったんです。人切
庖丁ぼうちようとうを二本腰にさして百姓や町人を見下ろして歩くあの威張り
腐った様子からして野暮で武骨で図々しくて我慢が出来なかつ
たのです——お母さんをお願いしても、亡なくなったお父さんの遺
言だからといってとても聴いちゃ下さらないだろうし、それに
お母さんの一生懸命なところを見ると、止して下さいとも言いかね
て妹に相談しました」

「——」

「するとお冬は、幸いここの押入にある二千両、今晚のうちに隠
してしまえば、旗本の株の話も立消えになるだろうし、後でお母
さんには私からお詫をして、二千両の金は折を見て床下から出し
て上げるからと——昨日の晩二人でそつとここに隠しました」

「——」

「お願いです、お母さん、私を二本差にするなどと——そんな馬鹿馬鹿しい望みは起さないで下さい、——私は町人で宜いじゃありませんか、正直で、腰の低い町人——腹さえ綺麗で人に見下ろされなければ、それで結構じゃありませんか、ね、お母さん」

斯う言いきつてしまうと、憶病らしい佐太郎もすっかり勇氣づいて、まだ憤々とした怒りの納まらぬ母親の袖に縋って、子供のようになだるのでした。平次もガラッ八も黙ってこの家庭の小悲劇を見詰めているほかありません。

五

「お早う、姐さん」

「あら、八さんたいそう早いですね」

平次の女房のまだ若くも美しくもあるお静が、入口の掃除をしているところへ、大きい影法師を這わせて、ノッソリと八五郎は立ちました。

「今朝は寝起きの早いわけがあるんですよ。昨夜の一埒を聴いたんですか、姐さん」

「いえ、あの人はお上の御用向のことと言うと、何んにも言わないんです」

お静には少し怨ずる色がありました。

「えらいッ、さすがは銭形の親分だ。実はね姐さん、斯うなんですよ」

「金貸しのお角の家で、自分が見当をつけて、死んだ娘の寝ている畳の下ゆかいたの床板を剥ぐと探し抜いた二千両の小判が、二つ千両箱

に入ったままそっくり出て来たじゃありませんか」

「まア」

お静は姐さん冠^{かぶ}りの白い手拭を取って、初夏の朝日に美しい顔をさらしたまま、また存分に可愛らしい眼を見張っております。

「——その金が出て来ると、男勝^{まさ}りと言われた後家のお角婆さんが——見付かるのは一日遅れましたが、お約束はお約束だから、このお礼はお受取下さい——と切口上で百両の金を出した」

「まア」

「親分がそれを黙って受取って、三つ留^{たなちん}った店賃でも払うのかと思うと大違い——こんなものを受取る筋合いはありません——とポンと返した、いやその小気味のよかったこと」

「止さないか、八」

平次はいつの間にやら、入口に顔を持って来ました。

「親分へ言ってるんじゃない、あっしは姐さんに聴かせているんですよ。ね、姐さん、親分は大した人ですぜ。大枚百両の金に眼もくれねえ——あの時はあっしも正直のところ、二分や一両のわけまへがあるだろうと楽しみにしていたが、ポンと威勢よく突返した親分の男振りを見ると、胸がこうスーとして、二分や一両にこだわる気がなくなつて、ただもう無性に嬉しくなりましたよ。へん、どんなもんだ、日本一の銭形の親分を見てくれ——と言つた心持でね」

お静はこんな話を聴かされると自分のことのように極り悪がつて狭^{せま}いお勝手に逃げ込みましたが、当の平次は以てのほかの顔で、

「止さないか八、俺はそれどころじゃないんだ。昨夜はろくに眠

らないほど考えたが――」

「親分でもね、やはり、大きな魚を釣り落したような心持で――」

「馬鹿だなア、そんな事じゃないよ。あの娘の死骸の側にあつたという煙草入が、番頭が入口を見張っている部屋の中で、何うして無くなったんだ――格子から一間も離れていたというが――」

「へエー、そんなつまらない事が心配でね」

「あの娘は卒中や癩癩そっちゅう てんかんじゃない。どうして死んだんだ――あの死顔は容易じゃないが絞められた痕もなく、身体には蚤のみにさされたほどの傷もないのはどういうわけだ、――二千両の小判は捜し出しても、これが判らなきゃ俺は我慢が出来ない。どうかすると、大変な間違いをやつて居るんじゃないかな」

平次の悩みはこの解けない謎に首を突っ込んだためだったのです。

「毒害じゃありませんか、親分」

「いや、毒なら身体に徴しるしがある。お前も『検屍弁覧』でも読むが宜い、――唇にも、舌にも、眼瞼まぶたにも、皮膚はだにも何んの変化かわりのない毒はない筈だ。本道（内科医）が二人で立会つて診て、何んの変りもないと言っている」

「それならやはり頓死とんしじゃありませんか」

「いや頓死ではない――煙草入を持込んだ奴――男か女かは解らぬが、ともかく死骸の側に煙草入を持込んだ人間は何にか知っているに違いない。娘を殺して二千両の金を持出すつもりだったのかな」

「それじゃあの倅じゃありませんか」

「いや違う、倅の佐太郎なら妹を殺さなくたって二千両の金を持

出せるわけだ」

「それとも旗本が株を売るのが嫌になって——」

「それも違う、外からは曲者が入れない」

平次は抜き差しのならぬ迷宮に首を突っ込んだ様子です。

「さア判らない——もういちど行つて見ましようか、親分」

「そうだ、もう一度見るほかはない」

平次とガラッ八はもういちど飯田町へ——お冬の死の秘密を解くために出かける外はなかったのです。

お角の家は、二千両事件が一段落付いて、娘の葬とむらいの仕度にかかつておりました。大河内家の株を買う話はそれつきり打切られると、後からヒタヒタと押し寄せて来るのは、娘を喪うしなったという、大きな悲しみだけです。

男勝りと言われたお角も、二千両を隠して町人道を立て通した佐太郎も、その頃になってボツボツ集って来た近所の人達や、遠い親類を相手に、新あらたに湧き上がる悲しみに、泣いたり口説いたり、取止めのないことに紛まぎれております。

その騒ぎの中へ、もういちど顔を出した岡っ引の平次と八五郎が、どんな心持で迎えられたかは言うまでもありません。

「もういちど仏様を拝まして貰いたい」

「いま入棺にゆうかんするところで——」

渋る人々を掻きわけるように、奥の六畳に通った平次は、皆んなの眉をひそめるのも知らぬ顔で、危うく入棺前の娘の死骸を調べることが出来ました。

十八娘の死骸は、多少の変化があるにしても、毛ほどの傷も斑はん点てんもないことはもとの通りで、さすがの平次も、この執拗しつような冒瀆ぼうとく

に自分を恥じ恐れて、黙って引下がるほかはなかったのです。

が、もしこれが他人の手に掛って殺されたのだとしたら——平次の正義感は、僅かに残る疑いをかき立てて、最後の瞬間までもと注意を集注しました。

「八、灯りを」

「へエ」

平次の心持を察して差出した仏前の蠟燭ろうそく、それを受取った平次は冷たい死骸の首を片腕に抱き上げて、曾かつて桜貝のように美しかったであろうと思われる娘の右の耳の中を念入りに調べました。

何んの異常ありません。

「親分さん、もう沢山じゃございませんか」

我慢のなりかねたのは母親のお角です。その後ろには多勢の人達が非難と危惧きぐの眼を光らせて、ジッと平次の方を見詰めております。

次は左の耳の中を——

「あっ、八。これを見ろ」

「血のようですね」

「観世縫かんぜよりを拵こさえてくれ、先を濡ぬらして」

「へエ——」

ガラッ八の拵えた紙縫、その先を濡らして娘の死骸の耳に入れると、先端は引抜くに従って真っ赤になるではありませんか。

「血だ」

ガラッ八はツイ大声を出します。

「耳垂みみだれを患わずらってはいなかったのかな」

平次は誰へともなく訊ねました。

「耳垂なんかあった筈はない」

応えたのは兄の佐太郎でした。

六

「驚いたね、親分」

庭へ出ると、ガラッ八はそつと平次に囁くのです。

「俺も驚いたよ、あんなのは始めてだ」

「ひどい事をしたものですね」

「鬼だよ。あんな可愛らしい娘の耳へ、畳針を打ち込んで、丁寧に血を拭き取っておいたのは恐ろしい胆力だ」

平次の眼はこの残酷な下手人を憎む心に燃えます。

「店の方の二千両捜しの騒ぎに紛れてやったんですね」

「その通りだ。——紺羅紗の煙草入を持って行った人間だ——が金之助ではあるまい。金之助は店から、動かなかった」

「すると？」

「下手人は金之助に罪を被せようとして煙草入を持込んだ——が、もう一人の人間がいる。それは金之助を救うつもりで煙草入を隠した人間だ」

「恐ろしくこんがらがってしまいました」

「余計な小細工をするから反って悪事が露見するんだ。煙草入なんか持込まなきゃ、娘は頓死で済むのに、——悪人はそうしたものだ、天罰だね」

「誰でしょう、そいつは？」

「解らないよ」

「癩しやくにさわる野郎じゃありませんか」

「腹を立てる隙に、お前はこの店の者で、釣の好きな者はないか訊いてくれ」

「へエ」

ガラッ八は飛んで行きましたが、間もなく釣の好きなのは手代の与助で、これは自慢の継竿つぎざおを持っていることまで聴いて来ました。

「その継竿に変わったことがなかったか、与助に訊かなきゃ――」

「待って下さい、あつしが行って来ましょう」

やがてガラッ八は、見事な継竿を持って、首おかしげながらついて来る与助と一緒にやって来しました。

「その継竿に何か変わったことがあるというのか」

と平次。

「悪戯いたづらをした奴がありますよ、糸も針も滅茶滅茶だ。こんな掛けようをされちゃ、竿さおがたまらない」

醜みにくい顔をゆがめて腹を立てる小男は、もう平次には用事がない様子で、

「八、こんどは、昨日この路地を釣竿を持って歩いた人間がなかったか訊いて来てくれ。隣の酒屋の小僧は、十四五で物好きで、隙見と買食いの名人だから、大抵のことは知ってるよ。これを持って行ってやって見な」

平次は小粒を一つガラッ八に持たせて外へ出してやると、自分は引返してそつと裏口に身を寄せました。

家の中は妙に静まり返って、何やら不安を孕はらんだまま、初夏の

陽は次第に長^たけます。

間もなくガラッ八が帰って来ました。

「親分、きのうの朝、釣竿を持って路地に入った人間はわかりましたよ」

「女だろう」

平次はズバリと言い切りました。

「どうしてそんな事が？」

「まあ宜い、お前は店口へ行ってもういちど怒^ど鳴^なれ、いま言った通りで宜い——きのう釣竿^{つりざお}を持って路地へ入った人間が解りましたよ——とな——町内へ響き渡るような大きな声でやるが宜い」

「へエ」

「そして、一番先に飛出した奴を縛るんだ」

「へエ」

「抜かるな、相手は食えないぞ」

「へエ」

ガラッ八は店の方へ、平次はもういちど裏口へそつと身を寄せました。

間もなく店の方から、ガラッ八の怒鳴る声、

「——きのう釣竿を持って——」

その声が終ると同時に、裏口へそつと滑^{すべ}り出した者があります。

「待て待て、何処へ行く」

「あのちよいと」

「お前の行くところは決まっている、来い」

「あっ」

飛び退るのを追いすがって、片袖だけ平次の手に残りましたが、

曲者は一文字に廊下を飛んで店口へ――

後を追った平次、何分にもなれない他人の家でしばらく手間取って店口へバアと顔を出す、そこには手ぐすね引いて待っていたガラッ八の八五郎、

「御用ッ」

見境もなくむんずと平次に組付いて来たものです。

「馬鹿、俺だ」

「あつ、親分」

「俺より一と鼻先に来たものがあつた筈だ」

「誰も来ませんよ」

「本当か」

「本当にも嘘にも」

「あッ、やられた」

「どうしたんです、親分」

「廊下を追っかけるうちに、お勝手へ飛込んでやり過ぎたんだ」

「行つて見ましょう」

「無駄だ、今頃は裏口から飛出して、九段坂までも行っているよ」

「誰ですいったい下手人は」
げしゅにん

「行つて見よう、ともかくも」

しかし、二人は間に合いませんでした。曲者は裏口から飛出すと、九段へ一足飛に飛んで白昼の牛ヶ淵へ、礫のように身を投げてしまったのです。

下手人――お冬を殺して、牛ヶ淵に飛込んだ曲者は、言う迄もなく姪のお梅だったのです。

この事件は二千両事件と絡んで、相当複雑でしたが、後でガ

ラッ八にせがまれて平次の説明したところによると、

「なアに、何んでもないことさ。お梅という女は恐ろしい女で、金之助と一緒になるつもりだったが、金之助が若くて可愛らしいお冬に心引かれていたのを見て、ムラムラとお冬を殺す気になったのさ、——恐ろしい嫉妬だ、——尤も欲も絡んでいた。お冬を殺して床下に隠してある二千両を持出すつもりだったが、あの晩はそこまで手が延び兼ねた、いずれそのうちに二千両は盗み出して、あの家を飛出そうと、折を狙っていたのさ」

「へエ——悪い女があるものですね」

「紺羅紗の煙草入は、金之助憎さの一心で持って行った。死骸の側におけば金之助に疑いがかかると思った——ところが翌る日の朝金之助に逢って見ると、金之助はまだお梅の方に気があって、お冬のことなどを考えてもいないと解って、紺羅紗の煙草入を死骸の側へおいて来たのが心配になった、——そこで与助の釣竿つりざおを持出して、朝のうちに路地へそっと忍び込み、格子の外から煙草入を釣ったのさ——煙草入は格子から一間以上離れたところに転がっているから、手でも棒でも引寄せられないし、部屋の入口には番頭の平吉が頑張っている」

「うまい事を考えたものですね」

「恐ろしく悪智恵の廻る女さ。が、そんな細工をしたばかりに、反かえって頓死で済むお冬の死骸を、俺がもういちど調べる気になったのだ」

「ところで親分はどうして下手人が女とわかったんです」

お梅を追い出す前に、平次の言った言葉をガラッ八は思い出したのでしよう。

「お冬のような若くて羞かしい盛りの娘の寝て居るところへ入って、お冬に油断をさせて、耳打ちでもするような恰好で、あんなひどい殺しようをするのは、女でなきゃ出来ないことだ」

「なるほどね」

「悪い女には相違ないが、——俺はどうも若い女を獄門や死罪にしたくない」

平次は妙なことを言うのです。

「すると親分はわざとあの女を逃したんで？」

「飛んでもない、——そんな馬鹿なことができるものか、岡っ引が大事な下手人をわざと逃したなんて言い触しちゃ大変だぜ、——それに牛ヶ淵が近くなったって、そこに飛込んでくれると決ったわけじゃあるめえ」

「へえ——、そうですかね」

ガラッ八はまだ腑に落ちない顔をしているのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「東北文庫」昭和二十一年三月号 新岩手社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部